

〔提 言〕

家庭は子どもの育ちの基地

東北文化学園大学

中 川 英 一

親の心の温かみ、そして家庭の温かみを感じながら育つことが子どもにとって幸せであり、また何よりも大切なことである。そういう幸せのなかでよい育ちがすすめられていく。よい育ちとは、健康な身体に育つとともに、自主性や思いやりという「人」として大事な育ちを獲得していくことである。親から必要な世話を受けつつ、子どもの意思や自由が大事にされ、かつ自立に必要な援助が適切になされていれば、子どもは生まれ持つ自らの育ちの力を効果的に発揮することができる。

子どもが抱えるさまざまな問題の起源は家庭、そしてとりわけ親子関係にあるとあって過言ではない。しかしその親子関係のあり方はそれを取り巻く社会のあり方に大きく影響を受ける。経済至上主義、競争社会、地域の間人関係の疎遠化、個人主義化、孤立化などは親の意識をゆがませてきた。さらに情報過多な社会情勢も親の子育てを誤らせる要因になっている。少子化、孤立化のなかである者は過保護に、また少子化、競争社会化、情報過多な社会情勢のなかである者は過干渉にはしる。そして個人主義化は自己本位な親をつくり、育児怠慢や育児拒否を生み出している。

子どもに対する親の関与のあり方は、もし過多であれば子どもの意思や自由を損ねるし、過少であれば親の心の温かみを感じることができず、また親への依存心を断たれてしまう。

これらはいずれにしても子どものいきいきさを奪う結果となる。いきいきさは果敢に育とうとする子

どもの生来的なエネルギーの現れであるが、いま正にその子どものいきいきさに暗雲が立ち込めている。

最近、子どもに増えている異常な状態、例えば、日常的な、倦怠感、無気力、体力減退、集中力喪失、情緒不安定などはここに述べた子どもの育つ底力としてのいきいきさを喪失した姿である。このような子どもの状態が学校など子どもの集団の場で気づかれ憂慮されている。そしてしばしば問題の背後に家庭、そして親の問題が浮かび上がる。一家だんらん欠ける家族、子どもの孤食、家庭不和、親本位の日常生活、親の誤った子育て意識、育児ストレス、児童虐待などなど。

家庭の子育て機能の低下がいわれているが、家庭は常に子どもにとっては育ちの基地である。心身の育ちの基本的な部分は家庭で育てられる。他に委ねることのできない大事な部分がある。健康な身体、自主性、思いやりなど「人」として大事な育ちの基礎はまず家庭で育てられなければならない。

家庭の子育て機能の低下の問題がいわれている今、その実態を把握するとともに、その問題の所在を明らかにすること、そして解決への糸口をさぐることが課題とされなくてはならない。この度、本号において「子どもの学校生活から垣間見える家族」というタイトルで特集を組み、家族の問題を通して子育て家庭を振り返り、以上述べた課題に関心を呼び覚ましていただくこととした。